

〈論文要約〉

## 上毛野における古墳時代社会の成立過程

深澤 敦 仁

本論文は、東日本屈指の古墳時代社会の繁栄を成し遂げた「上毛野地域」(以下、上毛野)が、その基礎を築いたと考えられる3世紀から4世紀にかけての動向について検討を加えることによって、その成立要因を明らかにしようとするものである。

以下、各章毎に節構成と論文要約を記述する。

### 第1章 序論

第1節 本研究の目的

第2節 本研究での前提

第1章では、本論が拠る2つの前提(歴史理解・空間理解)を提示した。

歴史理解では、上毛野において東日本屈指の古墳時代社会が築かれたという事実の要因が多なる政治的・文化的情報の流入という外的要因のみではなく、その時勢に符合した様々な外来情報の流入を在地が柔軟に受容したという内的要因に拠るところが多かったと想定し、受容者(上毛野の地域社会)の立場から考察することに一定の意義はあるという考え方を示した。また、空間理解では、上毛野が主に地勢的差異によってその歴史展開が異なることの見通しを論者がもつことから14地域(関連する周辺地域も含む)に区分することの考え方を示した。

### 第2章 石田川式土器の編年的研究

第1節 研究史と課題・目的

第2節 新田地域の土器編年

第3節 所謂「赤井戸式土器」の再検討

第4節 上毛野北部の土器編年

第5節 上毛野の土器編年の併行関係

第6節 土器編年から考えられる動態

第2章では、本論が依拠する時間軸としての土器編年について考察した。

まず、石田川式土器設定の契機となった石田川遺跡出土土器及び同遺跡を含む新田地域内の出土土器に編年的検討を加え、画期の抽出し、その土器様相を4段階に区分した。次に、所謂「赤井戸式土器」(吉ヶ谷式系土器)が色濃く分布する勢多地域(隣接地域の佐位地域を含む)、甘楽地域内の出土土器について編年的検討を加え、画期の抽出し、各地域の土器様相を4段階に区分した。さらに、樽式土器の様相が色濃く残存する群馬北部地域、

利根地域内の出土土器について編年的検討を加え、画期の抽出し、各地域の土器様相を4段階に区分した。その上で、これら地域毎の土器編年について、上毛野での基軸編年となる群馬南部地域の土器編年との併行関係を検証し、加えて、東海地域土器編年等との併行関係の検証も行った。

そして、これらの検討と検証に基づき、土器編年から認められる「在来の残存」「在来の移動」「在来の移入／外来の受入」「外来の定着」という4つの動態と示した。

### 第3章 古墳時代成立期の遺跡動態

第1節 上毛野における北陸系の遺跡動向

第2節 弥生後期の遺跡動態

第3節 古墳前期古段階の遺跡動態

第4節 古墳前期中段階の遺跡動態

第5節 古墳前期新段階の遺跡動態

第6節 遺跡分布の特徴と遺跡動態

第3章では、前章で示した土器編年に基づき、弥生後期～古墳前期の遺跡動態について考察した。

まず、この考察に入るために、論者が特に重要視する北陸系の遺跡動向について、吉ヶ谷式系土器のそれも含めて考察した。その結果、東海系の外来系土器の移入が圧倒的に多いとされる上毛野ではあるが、在地側からの検討に拠れば、東海系の外来要素の受容以前に、北陸系や吉ヶ谷式系の外来要素が比較的広域的に影響を及ぼしていることが確認された。

そして、このことを踏まえた上で、古墳前期古段階、古墳前期中段階、古墳前期新段階について動態を論じた。

古墳前期古段階の遺跡動態については、弥生後期後半段階の遺跡動態を把握した上で、①弥生後期後半段階での遺跡分布濃密地域、②弥生後期後半段階での遺跡分布希薄地域毎に、その把握を行った。その結果、この段階は様々な外来系土器の存在による複雑な遺跡動態の様相が伺えることが再確認され、群馬南部地域ではいち早く東海系外来要素の「外来の定着」が色濃く認められるものの、他の多くの地域では必ずしもそうした動態とはなっていないことが判明した。

古墳前期中段階の遺跡動態については、①東海系外来要素の「外来の定着」が顕著な地域、②東海系外来要素の「外来の定着」が希薄な地域毎に、その把握を行った。その結果、この段階は、古墳前期古段階の「外来要素のるつぼ」的動態は成りを潜め、外来要素の選択と定着というベクトルでそれらが地域融合していく動態を示すことが判明した。特に、「新田地域と群馬南部地域との動態が対照的であること」や「各地域が選択した外来要素が複数存在したこと」が地域毎の検討によって判明した。

古墳前期新段階の遺跡動態については、古墳前期中段階までの各地域毎での外来要素の選択受容の動態から、斉一性のベクトルで変化していく遺跡動態の兆候が看取された。そして、群馬南部地域、那波地域、佐位地域、新田地域などの平野部における遺跡動態が斉

一性を帯びることとともに、群馬北部地域、勢多地域、甘楽地域などの山麓・山間部においても遺跡動態が同調しはじめ、平野部を核とする地域社会の版図拡大がこの段階で実現していることが判明した。

## 第4章 上毛野における前方後方形墳墓の出現

### 第1節 研究史と問題の所在

### 第2節 前方後方形周溝墓の地域相

### 第3節 方形周溝墓と前方後方形周溝墓との相関性

### 第4節 前方後方形墳墓の設計企画に関する検討

第4章では、上毛野の古墳前期に造られる前方後方形周溝墓について、同時期の方形周溝墓との対比を踏まえながら、地域毎の様相抽出や存在性について考察した。

まず、上毛野の前方後方形墳墓の分布について、存在形態や立地環境を踏まえた上でその傾向把握を行い、その存在が群馬南部地域、甘楽地域、佐位地域、勢多地域、児玉地域など、上毛野の西半分の地域に偏在する傾向を把握した。

次に、方形周溝墓と前方後方形周溝墓との相関性について、上毛野の土器編年に基づく段階毎の様相を把握する中で、平面形状、平面規模、盛土、分布地域の様相変化を抽出した。その結果、前方後方形周溝墓が登場する古墳前期古段階以降において、各段階ともに方台部長が最大規模の周溝墓に前方後方形が採用されること、前方後方形の採用が方台部長の規模値の大きい地域に多いこと、そして、それらの周溝墓における方台部の規模値が20m前半を上限とすることを抽出し、これらが墳墓の階層性を意識した造墓意図の底流に存在していることを推定した。

さらに、前方後方形墳墓の設計企画を上毛野の土器編年に基づく段階毎の様相を把握する中で、墳丘長45～50mを境として設計企画が異なること、特定墳墓の設計企画が上毛野の前方後方形墳墓のプロトタイプ的设计企画であることを抽出し、これらが墳墓の階層化と時間的及び空間的な相関性を持つことを推定した。

## 第5章 墳丘構築構造の検討からみた高塚

### 第1節 目的と研究抄史

### 第2節 墳丘構築技術から抽出される高塚の特質

### 第3節 高塚出土土器と築造年代の相関性

### 第4節 前期古墳の構築時期の検討

### 第5節 上毛野における古墳前期墳墓の編年

第5章では、墳丘構築技術の視点から高塚の特徴を抽出し、そこから導かれる解釈に基づく前期古墳の再検証から、上毛野の古墳前期の墳墓の様相について考察した。

まず、その基点として、古墳前期新段階に位置づけられる成塚向山1号墳の発掘調査データから、高塚の墳丘構築工程復元と墳丘盛土層位毎の出土土器の把握を行い、高塚の出

土土器と築造年代の相関性について検証した。その結果、特定層位出土の土器が築造時期を示す土器として有効であるとの推定に至り、それらの土器群を第2章で提示した上毛野の古墳前期土器編年の中に位置づけた。さらには、成塚向山1号墳の築造時期比定を可能とする土器以外の遺物やその他の遺構情報との照合を通じて、その編年的位置づけについて複眼的検証を行った。

そして、成塚向山1号墳以外の上毛野の古墳前期墳墓について、可能な限りこの複眼的検証を行うことを通じて、地域毎の古墳前期墳墓編年案を提示し、その様相把握を試みた。

## 第6章 上毛野の古墳時代社会の成立

第1節 古墳時代社会成立前夜の諸相

第2節 古墳前期古段階における山麓ルートの形成

第3節 古墳前期中段階における外来要素定着の諸相

第4節 墳墓の重層化に関する諸相

第6章では、前章までの考察を通じて上毛野の古墳前期社会成立に至る特徴を抽出した。

古墳前期古段階では、この段階において認められる群馬北部地域に分布の核を持つ北陸系土器と勢多地域に分布の核のひとつをもつ吉ヶ谷式系土器の2つの動態が連結することによって、所謂「山麓ルート」が顕在化したことを推定した。そして、このことが、それまで歴史的、地勢的と特徴を異にする地域間を連結させ、上毛野での高塚の築造は確認されていない段階ではあるものの、古墳前期社会の枠組みの形成に大きな影響を与えたと位置づけた。

古墳前期中段階では、在地産S字甕の顕在化による生活様式の変化を伴う集団の変革や、前方後方形墳墓の設計企画の存在とその多出による墳墓ヒエラルキーの形成が確立したと位置づけた。

古墳前期新段階では、上毛野の古墳前期社会の版図拡大が実現し、それとともに高塚の築造も重層化が顕在化するが、その基盤として古墳前期中段階段階までの遺跡動態が大きく影響していると位置づけた。

## 第7章 結論

第1節 上毛野における古墳前期社会の特質

第2節 上毛野における古墳中期社会への胎動

第3節 上毛野における古墳時代社会の成立過程

第7章では、本論での考察を総括し、古墳前期古段階の「地域間連結」、古墳前期中段階の「地域内での階層化」、古墳前期新段階の「高塚の重層化」を経ることが、上毛野の古墳前期社会の成立過程であると結論づけた。そして、さらには、ヤマトとの関係性をより強いものとする古墳中期社会への胎動も古墳前期社会の中に看取されることも示唆した。